



### 職人さんの手で作られるすごさ

三輪春奈 記者 飯田市 4年



作業が全体で100あるとしたら、5〜10くらいを機械化が進む中、職人さんの手によって作られていることは、すごいことだと思います。

仕事は、大きく分けて「木取り」「組み立て」「職人さんがじゅんびしたさい料を、のみやかなでけすたりしながら形にし、職人さんが一つ一つ、手を加えていきます。けずりかげんなどは、作りながら親方に教わります。いけれど、ふくざつな組み方で、強いのびです。ちやくさいも付いているので、とても堅く、こいやさしい茶色になります。重たいおと、下の色が出てき、とてやさしい色になるそうです。



体験では5人の職人さんに教わったよ



「紙のやすりを当てる時は、指の先ちょよでやるといいよ」

面取り。「少しずつ落とせばいいからね」

### お客さんを笑顔に

溝口開人 記者 伊那市 6年



松本で家具作りが盛んになつた時代のことです。安土桃山時代の10〜20年かけて、本城が10〜20年かけて、建築され、工事に使った大工の技術が、中々に終わっても松本で生きた大工の技術をいきました。その人たちが、大工の技術が、を応用し、家具を作り出しました。

また、一年中、北から南へ空気が流れる、空気が乾いているため、木を乾燥させる必要がなくなりました。木を乾燥させる必要がなくなりました。木を乾燥させる必要がなくなりました。

先時、統昭、せ家、れ、また、一年中、北から南へ空気が流れる、空気が乾いているため、木を乾燥させる必要がなくなりました。木を乾燥させる必要がなくなりました。



### 「ねこタクシー 御子神さんがやってきた!」

作:山田佳子/AMG出版工房 絵:加藤アカツキ 集英社みらい文庫

わたしの大好きな本は「ねこタクシー 御子神さんがやってきた!」です。最初表紙を見た時、「ネコが運転するタクシーなのかな?」と、ワクワク、ドキドキしました。本には、三毛猫が出てきます。私はネコがとっても好きなのですが、その三毛猫の顔がふにやっとしていてかわいいです。読んでみると、家族のきずなや、友情が分かる、とてもいい1冊です。



本のひとびと

湯本楓花 記者 (中野市 5年)

#### <あらすじ>

中学受験の勉強に忙しい主人公の瑠璃。タクシー運転手のお父さんが「勉強教えるよか?」などと言ってくれるのだけれど、瑠璃はあまりお父さんが好きではありません。でも、ある日友達と一緒に猫屋敷へ。なんとそこで、三毛猫の御子神さんにあったのです…

みんなに読んでほしい**大好きな本**をぜひ教えてね。はがきやお手紙、ファクス、メール、なんでもオッケー。表面にある**「こども記者クラブ」**あてに送ってください。けいさいのおれいに「なーのちゃんタオルハンカチ」をプレゼント!

### もし 記者じゃなかったら

答えるのはなかなか難しい…

もし記者じゃなかったら? 僕にとって、この問いに答えるのは、なかなか難しい。なぜか。どんな仕事か自分に合っているか、就職活動を始めた大学4年の6月ごろまであまり考えたことがなかったからです。

「小さなころの夢」も思い浮かびませんし、小学生の時「学校の先生になりたいかな」と思ったのも長続きしませんでした。いよいよ大学を卒業するころ(1996年)、世の中はすでに「就職氷河期」になっていたのですが、自分でも「なんて悠長な…」とつっこみたくなるような大学生でした。

大学は文学部の哲学科に通い、そこで西洋の哲学ではなく、東洋哲学を選びました。この時点で、大学の先生から「フツウの就職はできないぞ」とおどかされました。答えないようなことを考える「哲学」なんて「もの役には立たない」と一般には思われているからでしょうか?

クラスの半分くらいはどこの寺のお坊さんの卵たちで、くりにく頭の同級生がいっぱい。そんな、どこか「浮世離れ」した雰囲気の中で、ともに仏教のお経の本やその解説書(いずれも漢字だらけの漢文)を、辞書を引ながら読み、そこで思いがけず、仏典の中で繰り広げられている思索の深さに引きつけられる自分を見つけました。

さまざまなものに宿っている「生命」とは何のかとか、人間とはどんな存在で、どう生きるべきなのかとか、答えのあるような、ないような問題

### 信毎こどもスクール

#### 「縄文の夏祭り」

7月21日(土) 午後0時30分~4時30分

【場所】茅野市尖石縄文考古館一帯

【メイン講師】刈谷俊介さん 俳優・日本考古学協会会員

【定員】先着親子50組 小学校高学年向け

【内容】縄文時代の料理やアート、音楽を体験してみるよ。表面の「こども記者クラブ」あてに申し込みしてね。

今日の「こども新聞」よんでみてね!



### 地域活動部 こども新聞デスク にしま たくや 西島拓也



を考へてきた先哲たちの文章を読みながら、考えるのは楽しかった。

でも、具体的に「自分が何になるのか」については、友だちが就職活動に励みだした後もあまり考えず、はたから見れば「ヒマそうな学生」だったのでしょう。忙しく就職活動をする新聞記者志望の友だちが「こんど信毎を受けるから、代わりに募集要項をもらってきて」と頼んできて、「いいよ」と言ったことが、今から思えば、大きな分かれ道でした。

自分の分としてもらった履歴書とともに、「なぜ信濃毎日新聞を自指すのか」という題の作文を送ると、どんなことを書いたかはもう忘れてしまったのですが、「なかなか哲学的でいいじゃないか」とほめられました。「そんなこともあるのかな?」と不思議な気持ちでしたが、なんと、そのまま入社してしまったのです。

そんな具合ですから、「もし記者じゃなかったら」を語るのは、僕にとってはとても難しいことです。ただ、答えのないものでも何とか「考える」ということだけが、今の仕事とどこかでつながっているように感じています。